

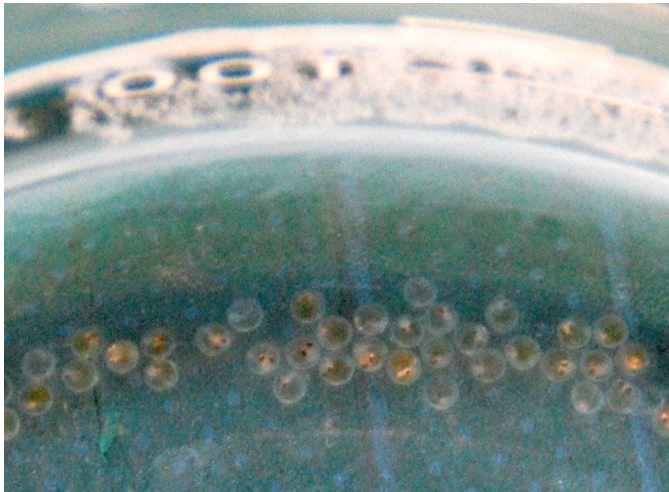
「メダカの卵と稚魚をもらおう(1)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

5年生の各教室にメダカの水槽が置いてある。同僚の理科教員がすべて用意してくれた。メダカの学習は、「いつでも観察できる」という環境が必要だ。



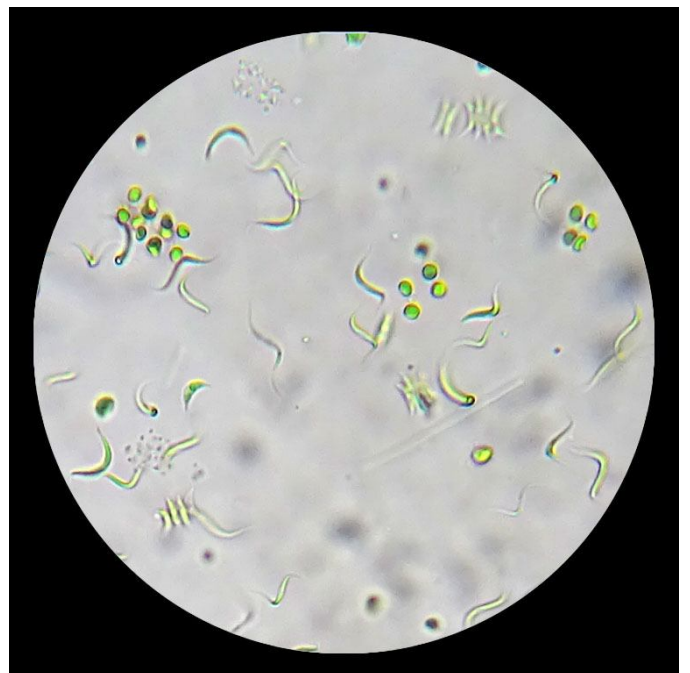
これは、業者から購入したメダカの卵。昨年度の5年生には、これを1人2個ずつ配布した。孵化したメダカが育って、今でも飼っているという子どもも多い。業者のものは、孵化までの日数が揃っていて、顕微鏡での観察にも使いやすい。



しかし、やはり水槽で飼っているメダカに卵を産ませたほうが絶対に良い。この水槽は、教室の明るい窓際にあるので、植物プランクトンが大繁殖し、「青汁状態」になっている。しかし、この環境が、逆にメダカにとっては最適で、ほとんど餌を与えなくても、たくさんの卵を産んでくれるのだ。生まれた稚魚は、毎日係の子どもが、別の容器に分けてくれている。



水槽の水を緑色にしている正体の一つが、このイカダモの仲間だ。光学600倍でもこの程度にしか見えず、非常に小さな植物プランクトンである。口が小さいメダカの稚魚でもエサにできるので、子メダカの飼育には、実は最適なプランクトンである。



顕微鏡観察では、枝豆を4個並べたような植物性プランクトンもたくさん見られる。これは「ヨツメモ」と呼ばれる、緑藻類(綱)の一種で、「テトラスポラ」*Tetrasporales*とも呼ばれる。4つの丸い緑の細胞(定数群体)が、ジュンサイのように、寒天状の基質に覆われているらしいのだが、顕微鏡の倍率や光源をどう調整しても、その寒天質は見えない。これもメダカの良いエサになるだろう。他にも、ミカヅキモやツヅミモなど、小型の植物プランクトンが多い。